

KANGEKI 間隙 vol. 16 長井龍 presents 【中島悠監督特集】

トーク：中島悠(監督) × 長井龍(映画プロデューサー) × 小原治(KANGEKI 主宰)



KANGEKI



(写真 左：中島悠 右：長井龍)

小原：今回はプレゼンターの長井くんが話しやすいように話してもらって、それに中島監督が応えていく形にしようと思うので、長井くんにもまるなげしつつ、たまに僕も混ぜろうと思います。

長井：はい。ではさっそく始めていきたいと思います。中島監督の作品を東京で上映するのは今回が初めてのことですが、いかがですか？率直な自己紹介も含め一言いただけたらと思います。

中島：中島です。こういう機会を初めていただいたので嬉しいですね。お客さんがお金を払って観に来てくれるわけで。学生時代に撮った作品がこうした場で上映されたことに感動しています。

■初監督作品のファーストカット

長井：お会いできて嬉しいです。中島さんは2年間名古屋で映像の学校に通われていて、卒業してこの4月から東映のドラマの助監督をやっているということで、ある意味、高校卒業して1年目2年目に『判子』と『世界征服やめた』を立て続けに撮って、この春東京に来て働かれています。凄い勝負な監督なんだろうなって思っています。



(『判子』ファーストカット)

一本目の『判子』のファーストカットで“悠”という名前を出すところとか、監督として生きていく覚悟をデビュー作に封じ込めようという勢いがある、自己紹介映画として完璧で。小原さんをご覧になっていかがでした

か？

小原：両作品とも大人が作った社会の形や人生のルールに取りこまれそうになる若者を主人公にしているけど、『判子』では、そんなマラソンコースから奔放に外れていく中島を監督自身が演じていますよね。自分もあっち(中島側)を走っていきたいという監督の憧れが例のファーストカットにもあったのかなと。

中島：憧れは強いですね。クリエイティブに生きるっていうのは元々憧れがあったし、地本の工場で働くという生き方には違和感を抱いてました。

■ラーメン事件

長井：『判子』と『世界征服やめた』を通して観て3つの共通項を見出しまして。1つ目は、進路を巡る物語。モータリウムじゃない、19歳・20歳の今後どうしていくのかという進路について主人公は真剣に悩む。そして、2作ともクリエイティブの方向を選択していることが面白いんです。2つ目の共通項は、周辺で巻き起こる犯罪性みたいなものですね。『判子』も『世界征服やめた』も犯罪を経て、今の場所から脱却ができています。3つ目は、とても日本的といいますか、“判子”そのものモチーフもそうですけど、中島の読み方(なかしま or なかじま)も含め面白い。『世界征服やめた』の方は「豆乳ある？」の台詞の背景で豆苗が置かれているところとかの言葉遊びが、中島監督と同じ言語圏で育ってラッキーって思いましたね。

中島：そこフューチャーするのは長井さんだけです。(笑)

小原：そういうのが好きなんです、長井くんは。(笑)

長井：そうなんです。そういうところが面白かったなって思っています。そもそも、この『判子』を撮るきっかけはどういう意図で撮られたんですか？



（『判子』左：牧野良太 右：中島悠）

中島：劇中の牧野良太というキャラクターも本人が演じているんですけど、彼とは高校時代からの親友で、一緒に演劇部にも入っています。当初牧野は卒業したら大学に行って何かクリエイティブなことをしたいって気持ちがあったんですけど、結局地元の工場に就職するんです。それからしばらくして一緒にラーメンを食べに行ったとき、そいつ、工場で働いているストレスでラーメン一杯食べきれなくて。それが僕の中では衝撃的な事件だったんです。そこから彼をどうにかクリエイティブに戻すために作ったのが『判子』です。牧野を主演にして、その役を演じる彼自身が抱えているものを実際に映画にして。

長井：それは牧野さんのある意味、工場でも働かれていて…実際に近いもの？

中島：そうですね。それで最終的にはラーメン食べれるようになったんですよ。（笑）今、牧野は東京の服飾の専門学校に通っています。本当にたまたまなんですけど、今日僕はこのポレポレ座で映画を上映させてもらっていて、牧野も今日、この服（中島監督が自分の着ている服をアピール）を渋谷のパルコで売ってるんです。デザインの選考があって、それに勝ち上がって、服を売るイベントに参加してるんです。それを僕が今着て映画の上映会をしているっていう…

長井：めちゃくちゃいいですね。『判子』撮ったから服もパルコで売れることになって。（笑）ラーメン一杯食べら

れなかった子が…

中島：僕の『判子』のおかげで（笑）ラーメン食べられるようになり、渋谷のパルコで服を売れるようになり。

長井：そういう、嘘が現実になってしまった、予言めいたものがある映画なんだっていう。けっこう粗削りな部分があって一回見ただけでは分からないっていうのが正直な感想だったんですけど、そこの飛躍みたいなのところって実際の物語に近いからなんだなって思って。端折ってしまっている部分が全然あるんだって思いましたね。

小原：確かに1回見ただけでは分からない部分もあるけど、言い方を変えると、噛めば噛むほど味が出るタイプ。どっちの作品にも言えることで、僕も見るときにもう一回見たいという気持ちになります。どっちの作品も物語の設定としてはよくある話だけど、具体的に起きている中身の一つ一つに関してはあんまり見たことがない。あらゆる設定それ自体は社会からの借り物でしかないんだけど、その中で固有の風景を獲得していくというのか。そこに中島悠的世界が立ち上がってきて、ぐっときました。

中島：ありがとうございます。

■中島映画の風景

長井：『判子』から『世界征服やめた』と撮るまでの一年間に心境の変化はありましたか？『世界征服をやめた』を撮るきっかけも含め教えてもらえたら。

中島：（心境の変化は）いっぱいあったと思います。『判子』は実際の事件、マキーのラーメン食べない事件から発展させたけど、『世界征服やめた』は元ネタがないので、自分の今思っていることを一本の作品にするというのが労力的にも大変でした。うまくまとまってない感はあるんですけど、真に思ってたのは、母親の存在です。母親の存在が僕の中で結構強くて。今回、『世界征服やめた』を

作る時、僕は東京に行くことが決まっていたので、家族と別れることも決まっています。それを母親の無償の愛の話にしたかった。劇中では無償の愛で息子の犯罪をかばって逃がすという話にしました。



(『世界征服やめた』)

長井：僕が海に沈める理由としては、コウイチ自身が島に帰ってこれなくなる理由を自分で作ったみたいなの。クリエイティブの方に舵を切るために沈めるという選択をとったんだと思っていたんですが。

中島：海に投げ捨てるというのは、当時凄い衝撃を受けた作品があって…それが『青春の殺人者』なんですけど、親殺しの話にめちゃくちゃ衝撃を受けて。その影響はあったと思います。

長井：先程（上映前）話してたら、この映画がまだ起承転結の起の部分だったということで。脚本上はもっとあるってことですか？

中島：本当はロードムービーを作りたいかったんです。移動している主人公を撮りたかったけど、移動するきっかけで終わっちゃった。本当はもっと撮りたかった。

長井：でもなんかそれは一周回って潔さだなと『判子』で凄い勝気な映画を撮って、その次に『世界征服やめた』という諦めのタイトルがまた面白く、でも結果として最後その島を出てクリエイティブの方へ行くというのは全然勝ち気で変わってなくて。凄いいい2作だなと思ってま

したね。

中島：当初は最終的にクリエイティブを諦める話にする予定だったんです。でもなんか世界征服の意味が自分の中でも変わってきて。ドッペルゲンガーとかスイカボーイズとかかいたじゃないですか？

長井・小原：スイカボーイズ？



(『世界征服やめた』スイカボーイズ登場シーン)

中島：当初の予定では、スイカボーイズたちとかドッペルゲンガーとかが消えていくみたいな話でした。

小原：コウイチが脚本書いている時にぐるぐるまわるあれか。(笑)

長井：どんどん薄まっていくということなんですね。妄想というか、ひいてはクリエイティブも妄想もなくなって、現実にどんどん根付いていくということですか。

■現実を突き動かす映画作り

長井：中島さんが岐阜出身で、愛知で撮って、ある意味でこの2作は地元という閉塞感の中で作られていて、上京してから撮られる映画が凄い楽しみです。心境がどう変わっていくんだろうなって。

中島：今東京に来て東映の刑事もので助監督をしているんですけど、リアリティがありつつ嘘をつくというのがドラマとか物語には必須で。それを現場で勉強していて

るんですけど、今日、『判子』見たらリアリティ皆無だ
と。

小原：フィクションにおける嘘のつき方ってことですよ
ね。その意味では両作品の演出はかなり独特。例えば『世
界征服やめた』でユウキの父が首を吊りますね。その前
のシーンでチェーンを落としたユウキのある予感と共に
音が消える。「凄く静かじゃない？今日お父さん見た？」
っていう、ああいう瞬間が一個入ると嘘のつき方として
「なんだこれ？」となる。コウイチが脚本を書いている
時にスイカボーイズ？が周りをぐるぐるして種がキーボ
ードに落ちてきたり、父親の死体を運ぼうとする時に足
元にスイカがごろんと現れたり、「なんだこれ？」となる
んだけど、映像として起きていること自体は物凄く具体
的なので、見ていて動揺しつつも引き込まれる力がある。
そういうところが中島作品の魅力だと思います。

長井：お母さんが玄関じゃなくて縁側から入ってくると
か、そこに生きている人はそういう動きをするよな、っ
ていう納得のできる嘘のつき方でテレ朝のドラマとかや
ったらいいんじゃない？ベタとはちょっと違う納得させ
方みたいな角度。

小原：長井くんは今回の上映会のために色々動いてくれ
ただけど、映画プロデューサーとしてはこれから中島
監督と何かやりたいって気持ちはあるんですよ？

長井：中島さんはどういう映画を撮るんだろうなって思
ったんですけど、中島さんの良さって、主人公が将来の2
択を迫られた時にとんでもない行動をしてしまう、そう
いうサスペンスみたいなものが上手いんだなと思って
いて、その究極の2択を扱う作品をぜひやれるように精進
しますんで。(笑)

小原：嘘のつき方は癖があって独特なんだけど、同時に
映画的な旨味もある。例えば『世界征服やめた』だと乗り

物が結構出てきますよね。フェリーとかバイクとか漁船、
あと母の運転で警察に向かっている車とか。ああいう乗
物が進む方向と主人公の気持ちの方向を重ね合わせなが
らドラマを作っているのが映画表現として染み込んでく
るものがあつたし、演出という意味で僕が特にぐっとき
たのが『判子』の階段です。同じ工場内にも天国と地獄が
あつて、階段を上った先が天国でも別の世界から見たら
そこは地獄でしかなくて。でも最後にマッキーが自分の
意志で別の階段を駆け上るとそこにいたのは中島で。こ
のクライマックス、ぐっときました。『判子』過去と現在
をフラットな地平で繋げながら最後あの山で2人が当然
のように再会して。それを僕らは画面の外から見て
いるので一瞬何が起きたのか分からないような置いてけ
ぼりをくらうけど、そんな…なんというか条理を超えた
瞬間に2人を導いているのは何かというと、それはやっ
ぱり映画なんだって思えるような作品でした。



(『判子』階段シーン)

長井：やっぱり、映画が現実を変えてしまうことって全
然あるなっていうことの一例だなと思って、とても感動
的だなと。マッキー自身を変えてしまったんだという
のは、嘘が本当になるみたいなことでもありますから。

小原：そろそろお時間ですので、最後に一言ずつお願
いします。

長井：世界初上映の中島さんの作品ぜひ帰り際にでも一
言お声がけいただければと思います。次回作見れるよう
にこちらも頑張りますのでよろしくお願ひします

中島：東京の色々な上映があるなかで、こんな僕の自主映画をお金を払って観に来てくれて、本当に感謝しかありません。ありがとうございました。

小原：では今回の間隙これで終了します。中島悠監督と、プレゼンターの長井龍君でした。ありがとうございました。

長井・中島：ありがとうございました。

(会場拍手)

2021. 10. 23 Space&Cafe ポレポレ坐にて

採録＝小原治



(初めでの上映会に来てくれたスタッフたちと記念写真)

中島悠 (なかしま・ゆう)

2000年12月18日生まれ。2019年、名古屋ビジュアルアーツに進学し、19歳の時に『判子』を監督。在学中に、GATSBY CREATIVE AWARDS 14th FINALにて日本一位となる。卒業制作にて映画『世界征服やめた』を制作。卒業後上京し、現在東映で連続ドラマの助監督を務めている。

長井龍 (ながい・りょう)

1991年、静岡市生まれ。早稲田大学映画研究会で自主映画を始める。在学時から『おとぎ話みたい』(13-14年/山戸結希監督)の興行や、『いいにおいのする映画』(16年/酒井麻衣監督)の製作に携わるなど、多岐に渡り活動。その後、レコード会社に就職し、『なっちゃんはまだ新宿』(17年/首藤凜監督)、『21世紀の女の子』(19年)、『ホットギミック ガールミーツボーイ』(19年/山戸結希監督)などの映画を製作。現在は映画会社のスターサンズに籍を置き、10月8日からは、製作作品の『人と仕事』(21年/森ガキ侑大監督)が公開。